

4次元多様体上の Yang-Mills 接続 Yang-Mills Connections over four-manifolds

○齊藤 璃空¹
*Riku Saito¹

Abstract: We solve the variational problem of a Yang-Mills functional and discuss the conditions for Yang-Mills connections. In especially, we investigate the minimum value of Yang-Mills functional over an oriented compact Riemannian four-manifold.

1. 序

主束の接続全体の空間の上に Yang-Mills 汎関数が定義される。この Yang-Mills 汎関数の変分問題において、臨界点となる接続を Yang-Mills 接続とよぶ。また、4次元 Riemann 多様体上の Yang-Mills 汎関数は、主束により決まる不変量で下からおさえられる。自己双対接続、あるいは反自己双対接続のとき、Yang-Mills 汎関数は最小値をとる。したがって（反）自己双対接続は Yang-Mills 接続である。本講演では以上の事柄について言及する。

2. Yang-Mills 接続

まず、Yang-Mills 汎関数を定義しよう。M を向きのついた n 次元コンパクト Riemann 多様体とする。M 上の主 G 束 P を一つ固定し、構造群 G はコンパクトな Lie 群とする。また、G の Lie 環 \mathfrak{g} の随伴表現 Ad により P の同伴ベクトル束 $P \times_{Ad} \mathfrak{g}$ がえられる。主 G 束 P の接続は、 \mathfrak{g} に値をもつ P 上の 1 形式 ω で

$$\begin{aligned} R_a^* \omega &= a^{-1} \omega a, & a \in G \\ \omega(A^*) &= A, & A \in \mathfrak{g} \end{aligned}$$

をみたすものとして定義する。A* は基本ベクトル場である。また、R_a は G の元 a による P 上の右移動である。 $\mathcal{C}(P)$ を P の接続全体とすると、 $\mathcal{C}(P)$ はアフィン空間になる。接続 $\omega \in \mathcal{C}(P)$ の曲率 Ω を $\Omega = d\omega + \omega \wedge \omega$ で定義する。ただし、簡単のため G は行列群とする。したがって、 Ω は P 上の \mathfrak{g} に値をもつ 2 形式 $\Omega \in A^2(P; \mathfrak{g})$ である。さらに M 上の $P \times_{Ad} \mathfrak{g}$ に値をもつ 2 形式 $\Omega \in A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ とみなすこともできる。いま G がコンパクトなので、 \mathfrak{g} 上の Ad G 不変な内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle : \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \rightarrow \mathbb{R}$ が存在する。これは各点 $x \in M$ において、 $P \times_{Ad} \mathfrak{g}$ のファイバー $P_x \times_{Ad} \mathfrak{g}$ に内積を定める。一方、M の Riemann 計量は外積空間 $\wedge T_x^* M$ に内積を与える。したがって、 $\wedge T_x^* M \otimes P_x \times_{Ad} \mathfrak{g}$ に内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ が定まる。これを M 上で積分することで $A^*(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ に内積 (\cdot, \cdot) が定義される。

定義 1. *1 を M の体積要素として、 $J : \mathcal{C}(P) \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$J(\omega) = \frac{1}{2} \int_M \langle \Omega, \Omega \rangle * 1$$

で定義する。J(ω) を Yang-Mills 汎関数とよぶ。

なお、* は Hodge の * 作用素 $\wedge^p T^* M \rightarrow \wedge^{n-p} T^* M$ である。つぎに Yang-Mills 汎関数の臨界点を調べよう。接続全体 $\mathcal{C}(P)$ はアフィン空間になるので、

$$\omega_t = \omega + t\alpha, \quad t \in \mathbb{R}$$

の形の直線に沿って変分を考える。 ω_t の曲率 Ω_t は

$$\begin{aligned} \Omega_t &= d\omega_t + \omega_t \wedge \omega_t \\ &= \Omega + t(d\alpha + \omega \wedge \alpha + \alpha \wedge \omega) + t^2 \alpha \wedge \alpha \\ &= \Omega + tD\alpha + t^2 \alpha \wedge \alpha \end{aligned}$$

となる。ここで d を外微分とし、 $D\alpha = d\alpha + \omega \wedge \alpha + \alpha \wedge \omega$ とおいた。 α は $A^1(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ の元、 $D\alpha$ は $A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ の元とみなすことができる。このとき D は ω に関する共変外微分である。いま、 $J(t) = J(\omega_t) = \frac{1}{2} (\Omega_t, \Omega_t) = \frac{1}{2} \int_M \langle \Omega_t, \Omega_t \rangle * 1$ とおいて、 $J'(0) = \left. \frac{d}{dt} J(t) \right|_{t=0}$ を計算する。

$$\begin{aligned} \left. \frac{d}{dt} \Omega_t \right|_{t=0} &= \left. \frac{d}{dt} (\Omega + tD\alpha + t^2 \alpha \wedge \alpha) \right|_{t=0} \\ &= D\alpha \end{aligned}$$

となるので

$$J'(0) = (D\alpha, \Omega)$$

をえる。ここで、D の形式的随伴表現 $D^* : A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) \rightarrow A^1(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ を

$$(D\alpha, \Omega) = (\alpha, D^* \Omega), \quad \forall \alpha \in A^1(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$$

で定める。 $\omega \in \mathcal{C}(P)$ が J(ω) の臨界点であるとは、 $\omega_t = \omega + t\alpha$ に対し、 $J'(0) = 0$ が成り立つときをいう。すなわち、すべての $\alpha \in A^1(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ に対して

$$J'(0) = (D\alpha, \Omega) = (\alpha, D^* \Omega) = 0$$

となるとき、 $\omega \in \mathcal{C}(P)$ が J の臨界点になる。

1: 日大理工・院(前)・数学

定義 2. 接続 ω が Yang-Mills 汎関数の臨界点になる条件は 定理 5.

$$D^*\Omega = 0$$

で与えられ, Yang-Mills 方程式とよぶ. これをみたす接続を Yang-Mills 接続とよぶ.

3. 4次元多様体上の Yang-Mills 接続

以下, M は向きをついた 4次元コンパクト Riemann 多様体とし, 1点 $x \in M$ の双対接続空間 T_x^*M を考える. いま M は 4次元で, その上の 2形式を考えると, Hodge の * 作用素は $*$: $\wedge^2 T_x^*M \rightarrow \wedge^2 T_x^*M$ となる. また $*^2 = 1$ であるので, $*$ の固有値は ± 1 である. ここで主束 P を 1つとると, 同伴ベクトル束 $P \times_{Ad} \mathfrak{g}$ に値をとる 2形式の場合に拡張できる. すなわち $*$: $A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) \rightarrow A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ となる. 固有値 ± 1 に対応する固有空間分解

$$A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) = A_+(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) \oplus A_-(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$$

をえる. \oplus は直交直和である. P 上の接続 ω の曲率を R と表すと, この直和に従って曲率 $R \in A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ は

$$R = R_+ + R_-, \quad (*R_{\pm} = \pm R_{\pm})$$

と分解される. ただし, $R_{\pm} \in A^2_{\pm}(P \times_{Ad} \mathfrak{g})$ である.

定義 3. $R_- = 0$ (すなわち $R = R_+$) である接続を自己双対接続とよぶ. また, $R_+ = 0$ (すなわち $R = R_-$) である接続を反自己双対接続とよぶ.

さて, 前節で定めた Yang-Mills 汎関数を曲率 R をもちいて表し, J が P に依存する位相的不変量によって下からおさえられることをみよう. $Ad G$ 不変な内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ をもちいて, 双線形写像 $\langle \wedge \rangle : A^p(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) \times A^q(P \times_{Ad} \mathfrak{g}) \rightarrow A^{p+q}(M)$ を定めると, 曲率 R に対して $\langle R \wedge *R \rangle = \langle R, R \rangle *1, \langle R \wedge R \rangle = \langle R, *R \rangle *1$ が成り立つ. ただし, 右辺の $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は前節 2 で定めた内積である. $R_+ \wedge R_- = 0$ であることに注意すると

補題 4.

$$\begin{aligned} \langle R \wedge *R \rangle &= (|R_+|^2 + |R_-|^2) *1 \\ \langle R \wedge R \rangle &= (|R_+|^2 - |R_-|^2) *1 \end{aligned}$$

が成り立つ.

双線形写像 $\langle \wedge \rangle$ をもちいると Yang-Mills 汎関数 $J(\omega)$ は

$$J(\omega) = \frac{1}{2} \int_M \langle R \wedge *R \rangle = \frac{1}{2} \int_M (|R_+|^2 + |R_-|^2) *1$$

で与えられる. 一方, Chern-Weil 理論により, 特性形式のコホモロジー類 $[\langle R \wedge R \rangle]$ は接続に依存せず, P で決まる. 特性形式を M 上で積分したものを, すなわち P の特性数を

$$c(P) = \int_M \langle R \wedge R \rangle = \int_M (|R_+|^2 - |R_-|^2) *1$$

とかく. $J(\omega)$ と $c(P)$ を比較してみると,

$$J(\omega) \geq \frac{1}{2} |c(P)|, \quad \omega \in \mathcal{C}(P).$$

等号成立は ω が自己双対接続, すなわち $R_- = 0$ ($c(P) \geq 0$ の場合) のとき, または ω が反自己双対接続, すなわち $R_+ = 0$ ($c(P) \leq 0$ の場合) のときである.

ω が自己双対接続または反自己双対接続のとき, $J(\omega)$ は最小値をとるので, ω は Yang-Mills 接続になる.

例 6. 構造群 G が $SU(n)$ の場合を考えよう. まず $U(n)$ の場合を考える. Lie 環 $\mathfrak{u}(n)$ の不変な内積として

$$\langle X, Y \rangle = -\text{tr}(XY), \quad X, Y \in \mathfrak{u}(n)$$

をとる. また, 主束 P の同伴ベクトル束を E とかく. ファイバーは \mathbb{C}^n である. したがって曲率 $R \in A^2(P \times_{Ad} \mathfrak{u}(n))$ に対して $\langle R \wedge R \rangle = -\text{tr}(R \wedge R)$ となる. さて, E の第 k -Chern 形式は

$$c_k(E, \omega) = \frac{(-1)^k}{(2\pi\sqrt{-1})^k k!} \sum \delta_{i_1 \dots i_k}^{j_1 \dots j_k} R_{j_1}^{i_1} \wedge \dots \wedge R_{j_k}^{i_k}$$

で与えられる. $\delta_{i_1 \dots i_k}^{j_1 \dots j_k}$ は, $j_1 \dots j_k$ が $i_1 \dots i_k$ の偶置換なら 1, 奇置換なら -1 , その他は 0 を意味する.

$$c_1(E, \omega) = -\frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \text{tr}(R)$$

$$c_2(E, \omega) = -\frac{1}{8\pi^2} (\text{tr}(R) \wedge \text{tr}(R) - \text{tr}(R \wedge R))$$

となり

$$\text{tr}(R \wedge R) = 4\pi^2 (2c_2(E, \omega) - c_1(E, \omega)^2)$$

をえる. 特性数

$$c_1(E)^2 = \int_M c_1(E, \omega)^2, \quad c_2(E) = \int_M c_2(E, \omega)$$

をもちいると

$$\begin{aligned} c(P) &= -\int_M \text{tr}(R \wedge R) = 4\pi^2 \int_M c_1(E, \omega)^2 - 2c_2(E, \omega) \\ &= 4\pi^2 (c_1(E)^2 - 2c_2(E)) \end{aligned}$$

をえる. とくに $SU(n)$ の場合は, $\text{tr}(X) = 0$ ($X \in \mathfrak{su}(n)$) であるので, $c_1(E, \omega) = 0$ となる. 定理 5 より次式をえる.

$$J(\omega) \geq 4\pi^2 |c_2(E)|.$$

4. 参考文献

- [1] 小林昭七, 接続の微分幾何とゲージ理論, 裳華房 1989
- [2] 茂木 勇, 伊藤光弘, 微分幾何学とゲージ理論, 共立出版 1986